



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2021年8月17日発行 第40号

8月に入りコロナ感染症の拡大が収まりません。コロナ禍でよく聞かれるようになった言葉に「不要不急」、「安全安心」があります。このような言動は、どのような行いをする場合でも常に気を遣っていることです。危機が迫る状況下においても説得力のない言葉の繰り返しでは、誰も振り返らないのではないのでしょうか。このような時にこそ、リーダーの心強い言葉や行動が、求められているのかもしれない…。

◎ あいさつの大切さ！

7月に開催された出雲フィル定期演奏会後に、皆さんからいただいたアンケートを目にする機会がありました。一般客の皆様からのアンケートは、概ね好評であり演奏者や主催者側の励みになる言葉が多く大変喜んだところです。一方で、参加者の皆様からもアンケートをとらせていただきましたが、「改善してほしいところ」の項目に気になる意見がありました。それは、「あいさつができない人が多い」というものでした。特に若い方が目立つということで、主催者側（出雲芸術アカデミー）としてとても気になる意見として捉えさせていただきました。

あいさつができないということは、コミュニケーションが成り立たないことにつながります。そのコミュニケーションを広辞苑で調べると「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達」とあります。要するに、あいさつはコミュニケーション活動をする切っ掛けにあたるといっても過言ではありません…。定期演奏会がセミナー形式をとっている以上初めて出会う方も多いオーケストラ編成となります。その為、あいさつが出来ていないと、人と人とのつながりが始まらない状態が続いていることとなります。気持ちを通じ合わない状況でアンサンブル（演奏のまとまり具合）が可能なのか疑問さえ生じてしまいます。プロ同士の合わせなら音楽で会話することも可能ですが、出雲フィルハーモニーは専門家・愛好家・学生と様々な立場の方々の寄り合いです。また、そのような形態をとっていることが出雲フィルハーモニーの特徴ともいえるわけです。ですから、気持ちを通じ合わないままで演奏することは、アンサンブルの精度にも影響してくると思われれます。学ぶ側と指導する側が同じステージに立つ場合には、お互いのコミュニケーション力が一番重要になってくることに気付かされます。

コミュニケーション力をアップさせるにはあいさつから始めることです。あいさつは、「相手に対し心を開く行為」ですから、人間関係が良くなることは必然です。あいさつはその人の支えになる行為で武器にもなります。人生を豊かにする一歩といってもよいでしょう…。

出雲フィルハーモニー及び出雲芸術アカデミーの大きな課題として受け止めさせていただき、ステージに立つ皆さんが気持ちよく演奏できるように努めます。



裏面へ

ちの通じ合う演奏を心掛ければ、もっとより良い演奏が実現できるのではないかと期待しているところです。

◎ オリンピックから学んだこと！

オリンピック東京大会2020がコロナ禍で開催され、先日、閉幕しました。コロナ感染拡大を抑えるために、ほとんどの競技が無観客開催となりました。アスリートたちにとって観客がいるのといないのでは、競技に大きく影響してくると思われます。しかし、私たち観戦者から見ると、無観客ならではの息づかいや競技場に響く残響などの臨場感が伝わってくるのがリモートでもよくわかりました。そのような環境の中でも、アスリートの皆さんから多くのことを学ぶことができましたので、出雲芸術アカデミーでも参考になるのではないかと思います。

一つは、競泳女子の“大橋悠依”選手の場合です。金メダル2冠は、素晴らしい快挙というほかありません…。大橋選手は、10代の頃は無名の選手だったにもかかわらず、数多くの五輪メダリストを育てた指導者に勧誘されました…。その口説き文句は、「大学4年間で伸びきれかわからない。時間をかけて育てようと思っています」でした。しかし、現実には恵まれた体格でもなければアレルギー体質でもあり、決して丈夫な体とは言えなかったそうです。そのような状況でしたので、しばらくは結果が出ませんでした。本人からは「辞めます」と直訴したこともあったそうですが、指導者から「自分の弱い部分をまず、見直さなきゃいけないんじゃないか」と諭され、「ここで逃げたくない」と思い直し踏みとどまることになりました。それでも強化合宿のメンバーから漏れた時、泣きじゃくっていたら、指導者は「もっと速くなって、僕を困らせてくれ」と言い、「本当に困らせますよ」と赤い目で返したエピソードを紹介していました。その後の大橋選手の凄まじい努力の結果、競泳選手としては遅咲きの25歳が見事大輪を咲かせたのでした。このことから、選手のあきらめない努力は勿論評価に値しますが、指導者の見る目と、一人ひとりの個性にとことん寄り添う姿勢に感服したところです。

もう一つは、競技を終えたアスリートの皆さんのインタビューからは、「感謝」の言葉が異口同音に聴かれました。この背景には、周囲の皆さんの理解と協力があってこそその快挙であり、一人では何事もなしえなかった事を実感として語られていたのだと思います。また、「観戦していただいた皆さんに喜んでいただけたならうれしい」というようなコメントも随所に聞かれました。このようなことから、アスリートやアーティストの皆さんも日頃は自分との戦いの連続ですが、その成果を披露する本番では、観客を感動させたり喜ばせることが最終の目的と気付かされます。自分のために努力していることが、他の人々の心を揺さぶる行為にまで及ぶアスリートやアーティストの皆さんの行いは、何と崇高なことであるのかがうかがい知れます。

オリンピックは閉幕し、次はパラリンピックが開催されます。今からどのような感動場面に遭遇するのかというワクワク感でいっぱいになります。リモート観戦する私たちも多くのことを学んでいきたいと思っています。



【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】